

南東アラビアのオアシスにおける考古学的景観

—オマーン、アル＝ハジャル遺跡およびユネスコ世界遺産バート遺跡群・アル＝アイン遺跡における踏査(2025年春季)—

黒沼 太一 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教
田邊幹太郎 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程
近藤 康久 総合地球環境学研究所教授

Archaeological Landscape in the Oasis in Southeast Arabia: Archaeological Surveys in the Site of Al-Hajar and the UNESCO World Heritage Sites of Bat and Al-Ayn, Oman in February 2025

KURONUMA, Taichi Assistant Professor, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies

TANABE, Kantaro Doctoral student, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo

KONDO, Yasuhisa Professor, Research Institute for Humanity and Nature

1. はじめに

現在のオマーンとアラブ首長国連邦が位置する南東アラビアを北から東に弓状に走る2-3000 m級のハジャル山脈沿いには無数のオアシスが分布している。これらのオアシスにはハジャル山脈を介してインドモンスーン由来の降水により水資源が供給されており、高温乾燥の砂漠気候に属する地域でありながらも、人びとが定住可能な場所を提供してきた。南東アラビアにおいてオアシスの初源は紀元前4千年紀後半ごろの前期青銅器時代に遡ると見られており、多くのオアシスでは6千年前ごろからの考古学的証拠が確認されている。中でも、ハジャル山脈南麓のバート・オアシスには前期青銅器時代遺構群が多数存在し、そうしたオアシスの代表格と言える(図1)。さらに、バートから東に23 kmのアル＝アインでは、非常に遺存状態の良い前期青銅器時代ハフィート期(前3300-2700年)の積石塚墓地が確認されているほか、両遺跡の中間に位置するアル＝ハジャル・オアシスにおいても前期鉄器時代(前1300-300年)の遺構群が存在しており、この地域の諸オアシスでは長期に亘る人びとの活動の痕跡を確認できる。

1970年代に始まるデンマーク・イギリス・ドイツ・アメリカ隊などによるバート遺跡群およびアル＝アイン遺跡の調査は、前期青銅器時代における考古学的景観を明らかにし、1988年には「バート、アル＝フトゥム、アル＝アインの考古遺跡群」としてユネス

コ世界遺産一覧表に記載された。その一方で、各国調査隊は特定の時代や対象に焦点を当てた調査を実施してきたため、世界遺産の範囲内に存在する遺構の分布状況・時代・性格の統合的な把握は看過されてきた。この状況は世界遺産範囲内の文化財保全にとって障壁となるため、現地担当省庁の依頼により、世界遺産範囲と周囲の緩衝地帯に分布する遺構群を記録してデータベース化するバート遺跡群デジタル遺産目録(以下、BatDHI)プロジェクトが近藤康久を代表に2013年から2017年まで実施された(近藤ほか2017)。さらに

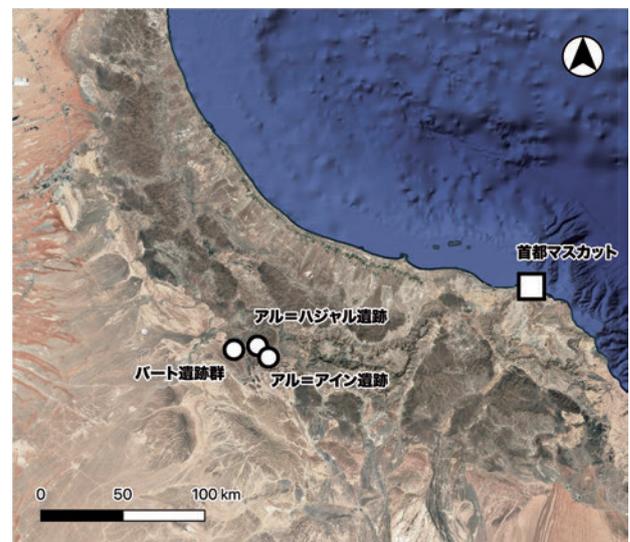


図1 バート遺跡群・アル＝アイン遺跡およびアル＝ハジャル遺跡の位置(Google Satellite イメージをもとに QGIS を用いて作成)

2024年にはバート遺跡群において追加の補足調査を実施し、これらの調査成果をもとに、旧石器時代からイスラーム期に至る遺構群を網羅し、現在報告者らはその分布と考古学的景観を議論する最終報告書を準備中である。

2. BatDHIの基本理念と2025年2月踏査の概要

BatDHIは、バート遺跡群及びアル＝アイン遺跡におけるUNESCO世界遺産範囲および緩衝地帯周辺の遺構を対象とした分布図と目録データベースからなり、分布図と目録は相互に関連する。対象範囲内に存在する全種類・全時期の遺構を対象としており、連番で各遺構に付番することで目録が将来に亘って拡張できるようにしている。目録には、出版物に加えて、官公庁提出された公知の報告書に掲載されたデータ、写真などを収録するとともに、各遺構で過去に行われた調査の履歴も収録したほか、当該遺構の位置座標や遺構・遺物の種類に関する情報が網羅されている。しかし最も主体的な情報は、BatDHIプロジェクトによるフィールド調査で取得したデータであり、既知の情報と対照・並列化・補完・改訂が可能のようにしている。時期に関するデータを取得しながら分布図を作成するため、必然的に考古学的景観に関する議論が可能となる。このような理念のもと、オアシス景観の変容に関する復元を試みた。

2025年2月の踏査における目標は下記の通りである。すなわち、(1)2024年度調査に引き続き目録内の欠損データや写真を補足する、(2)他の調査隊が報告・言及したがBatDHIには未収録の遺構の確認と登録、(3)既遺構を再利用した遺構の確認と登録、(4)既登録遺構の再検討、(5)そのほか新規発見遺構の登録、となる。

3. バート遺跡群

バート地区では、これまで未着手であった北東部とワーディー・アル＝ハジャルを挟んでUNESCO範囲の対岸に当たる部分の踏査を実施した。北東部では、前期青銅器時代ハフィート期の墓(図2)に加えて、鉄器時代と推定される墓を複数確認した(図3)。鉄器時代墓は複数の墓が接続した事例が複数確認できた。鉄器時代の墓はハフィート墓よりもより外側に分布しており、景観上の時期的相違点として捉えられる。ワーディー・アル＝ハジャルの対岸では、現代のバートオ



図2 バート遺跡群・ハフィート墓の一例



図3 バート遺跡群・前期鉄器時代墓の一例

アシスから最も遠い、およそ1.5 kmほどの長さの丘陵上を踏査し、ハフィート期やワーディー・スーク期・前期鉄器時代・イスラーム期などの遺構を45基記録した。2010年に実施されたアメリカ隊による踏査では20地点が報告されているのみであり(Cable 2012)、今回の踏査で遺構分布を刷新することができた。

UNESCO範囲並びに緩衝地帯においては、今シーズンも既踏査遺構の再確認と未登録の再利用事例を探索しつつ、目録への新規登録も継続した。以下、注目すべき発見例について述べる。

ハフィート墓であるDHI 526では積石塚の中心部が恐らく前期鉄器時代に改築され、新しい墓(DHI 1056)が埋め込まれている事例を確認した(図4)。また前期青銅器時代と見られる壁体DHI 56の延長でこれまで記録漏れしていた部分についても新規に登録した(DHI 1036および1037)(図5)。DHI 56は同じ遺構の特徴を持つDHI 72の延長部であり、1980年代の発掘調査によるとDHI 72の構築時期は前期青銅器時代に遡る(Brunswig 1989)。今回踏査した延長部分も遺



図4 パート遺跡群・ハフィート墓の再利用例



図6 パート遺跡群・開削式ファラージュの一例



図5 パート遺跡群・壁体

構的な特徴に大きな違いがないため、同じ時期に位置付けられる可能性がある。またイスラム期の井戸である DHI 648 についても付属する施設や接続する水路(ファラージュ)の詳細な記録を実施した。その結果、DHI 648 には揚水用の牽引動物を引き込むためのスロープと窪地、井戸と接続する開削式ファラージュを確認することができた(図6)。これらの特徴から、原動機によるポンプ式井戸が広まるまで用いられていた、ザジャラと呼ばれる伝統的な井戸と見られる。またファラージュの一部は先シーズンに記録したファラージュの DHI 750 と接続することを確認した。さらに井戸の南方には堤防上に別のファラージュが続き、複数の分岐を経て短冊状の耕作地様の区画に繋がっていることを確認した。2000年代に撮影された衛星写真ではこの部分はすでに荒蕪地になっているため、DHI 648 は遅くとも前世紀にファラージュ網とともに放棄されたと見られる。アル=フトゥム地区では、一部の墓における欠損データの補足のみ行った。

4. アル=アイン遺跡

アル=アイン遺跡では、先シーズンに記載を実施した鉄器時代の集合墓である DHI 277 複合体において、遺構の分布状況をより正確に記録するため、フォトグラメトリ用の画像を撮影した。DHI 277 複合体よりも小規模ではあるが同種類の遺構を含む可能性がある DHI 306 複合体においても同様の計測を実施した。現在、これらの取得データの処理を実施中である。

また、最も遺存状況が良好な 19 基のハフィート墓の西側部分で、新たに 3 基の遺構を確認した(図7)。これらの遺構は調査最終日に現地職員への遺跡説明中に見つかったため、詳細な記録は次シーズンに行うこととし、座標と簡易な記載に留めた。恐らくこれらの遺構のうち 2 基は著しく遺存状態の悪いハフィート墓であり、残る 1 基は時期不詳の石組み遺構と見られる。

5. アル=ハジャル遺跡

アル=ハジャル遺跡は、巨大な壁状遺構とその周囲の遺構群からなる(図8)。これまではアル=バーナ遺跡と呼ばれてきたが、実際にはアル=バーナの隣街であるアル=ハジャルに存在するため、その地名を用いる。南東アラビアでは前期鉄器時代から城砦が各所に築かれるようになるが、アル=ハジャル遺跡の壁状遺構は異質であり、ワーディー・アル=ハジャルの河谷にある沖積地を直線に横断するかたちで築かれた一種の防塁状の構造を特色とする。北端から南端の総延長は 700 m 超におよび、最も高い部分の地上高は 4 m を超える。このような巨大な防塁は南東アラビアではほとんど知られておらず、重要な事例と言える。この防塁は 4 つのエリアに分けることができるが、今シーズンはワーディー・アル=ハジャルの北岸に位置する第



図7 アル＝アイン遺跡・新規発見遺構



図8 アル＝ハジャール遺跡・防塁

1-3エリアのフォトグラメトリによる三次元計測を実施し、構造の把握を試みた。

防塁は第1エリアと第2・3エリアで構造が異なる。第1エリアでは比較的低い壁が二重に連なる一方で、北側の山にも低い壁が築かれている。第2・3エリアは最も構造物の残存状況が良く、防塁の西側に突き出るかたちで第2エリアに2箇所、第3エリアに1箇所の稜堡状の突出部が存在し(図9)、また防塁を東から西に貫いて直交する2つの丘陵も天然の稜堡として組み込まれていたと見られる。第2エリアでは東側側面に階段(図10)を発見したことから、この防塁は西側からの攻撃に対応するための施設であったことがわかる。今回の踏査では、防塁の一部にさらに墓を築くなどの事例も発見した。切り合い関係を見るとこれらの墓は防塁の使用停止後に構築されていたと見られ、形態的な観点からは前期鉄器時代と見られる。このことはこの防塁が前期鉄器時代のごく短い期間のみ使用されていた可能性を示す。



図9 アル＝ハジャール遺跡・稜堡



図10 アル＝ハジャール遺跡・防塁上の階段

6. まとめと展望

2025年2月の踏査では欠落していたデータの補足と新規発見遺構を前シーズンから継続してBatDHIに登録した。またこれまで未踏査であった部分の現地確認に着手し、遺構の分布を把握することができた。UNESCO世界遺産とその周囲の緩衝地帯の範囲については現存遺構の悉皆的な登録が実現されつつあると

言える。現在、最終報告書への収集データの反映を進めている。

また世界遺産地区からワーディー・アル＝ハジャルを挟んで対岸の地区での踏査により、この地区には先行研究で未報告である遺構が複数存在することが明らかになった。今後北東方向に踏査を進めていく計画だが、多くの未知の遺構が存在する可能性が高く、バート・オアシスにおける、より解像度の高い考古学的景観の復元に有用な情報を収集できると見られる。

本調査においてオマーン国遺産観光省バート遺跡事務所のもハメド・アル＝カルバーニ氏、スーレマン・アル＝ジャブリ氏、アスマ・アル＝ジャッサシ氏、バ

ドル・アリー・アル＝モクバリ氏から多大な支援を受けた。記して御礼を申し上げます。

■参考文献

- ・ Brunswig, R. H. 1989 Culture history, environment and economy as seen from an Umm an-Nar settlement: Evidence from test excavations at Bāt, Oman, 1977/78. *The Journal of Oman Studies* 10: 9-50.
- ・ Cable, C. M. 2012 *A Multitude of Monuments: Finding and Defending access to Resources in Third Millennium BCE Oman*. PhD dissertation. East Lansing [MI], Michigan State University.
- ・ 近藤康久・片岡香子・早川裕式・三木健裕・黒沼太一・小口高 2017 「先史オアシスの形成過程をさぐる—オマーン、バート遺跡群の環境考古学的調査—」『第24回西アジア発掘調査報告会報告集』88-93頁 日本西アジア考古学会。